はじめに

花園大学では人権教育に力を入れておりますが、それは諸君が中学、高校で受けてきた人権教育とは異質なものです。皆さんの中にはこれまでの人権教育に食傷したという人もおられるのではないかと思いますが、タテマエではなくてホンネをぶつけあおうというのが本学の人権教育です。

人権とはそもそも人間固有の権利を守るものであります。人間固有の権利で一番大きいものは生命です。自分の生命をいとおしむ者こそが、それだけに他の人々の生命をいとおしむということです。

昨年、阪神・淡路大震災で6000人を超える人々が亡くなり、未だに仮設や避難所や待機所で大勢の人々が日常的でない生活を送っている状況に、全国各地から目を見張るばかりの大勢のボランティアが集まりました。花園大学からも延べ数百人のボランティアが、長期に短期に被災者支援の活動に、被災された方々が生きることを支援をするための活動に参加しました。それは日本の近代の歴史の中でも最も規模の大きかった人権擁護活動であ

ると私は考えております。

今日、講師としてお招きいたしましたのは、あなた方の先輩、1972年、史学科に入学された北垣内敏幸さんです。北垣内さんは尼崎で電気事業を営んでおられましたが、震災と同時に芦屋でボランティア活動をされ、ボランティア委員会の代表をつとめておられます。その貴重な体験をお伺いして、自らの生命をいとおしむ、他人の生命もいとおしむという人権の基本をしっかりと胸に据えていただきたいと思います。なお、北垣内さんのおつれあいも花園大学の国文学科のご出身で、大学とはとりわけ関係が深い方であります。かつて花園大学がこの地に移転する前の規模の小さかった、その当時の大学で学生生活を送られました。キャンパスが今日のように整備されてからは初めてお見えになったということで今昔の感を覚えておられました。それでは北垣内敏幸さんに、お話をお願いしたいと思います。

１９９６年4月

花園大学副学長・人権教育研究委員会委員長

小　野　　信　爾

1996年度新入生オリエンテーション講演

大震災！人として何をすべきか

北垣内　敏幸

（芦屋市ボライティア委員会代表）

おはようございます。皆さん、ご入学おめでとうございます。非常に懐かしく思っておりますが、学校が全然違いますので、今の花園高校のところにある建物が、私がおりました学校でございます。こちらに来ましたのは二回目、まだ学生が800人か900人の時に一度、クラブの関係で来ました。それから比べて高い建物がいっぱいありまして、これはどこかいなと見違えました。建物だけでなく、今回、小野先生からお招きにあずかりましたが、以前は人権教育研究委員会というのはありませんでした。人権とか差別の問題で、教授に、「こんなんではあかんやないか」と言うてデモをしたり、すわり込みをしたりして、もっと目を開けと尻を叩いていたんですが、逆に、教員が学生の尻を叩いているのが今日ではないかという

感じがいたしています。

とりあえず、芦屋へ

本当はこんな高いところから皆さんにお話をする立場ではありません。一般の市民です。今回、阪神大震災が起きまして、私の住所は尼崎ですが、皆さんもこの近くの方がおられると思いますが、すごい地震がありまして、周りが倒壊、半倒壊、生き埋めになったりしまして、私の小さな家も半壊の状態でした。その中で、ボランティアをなんでやったんやということですが、私ももともとボランティアという意識はありませんし、ボーイスカウトのお手伝いをしたり、留学生のファミリーホストでお友だちになったりしていたんですが、単に自分の楽しみとしてやっておりました。それが、大震災が起きました時に、映画で見るような世界、ゴジラが踏んづけたようにビルが倒れたり、自分が知っている家が倒壊したりする中で、仕事当分、できへんのと違うかと。いろんなところに電話をしました。西宮にも神戸にも電話しました。震災からそんなに経ってないんですが、1月20日くらい

にはどこの自治体もボランティアがいっぱいで「もう、いりません」という答えが返ってきました。いや、まだまだ募集をやっていましたという自治体もありますが、情報が混乱していた中で、唯一芦屋から、「ぜひ来てください」という声がありました。私は神戸と西宮に電気技術者ということで登録だけさせてもらって芦屋に向いました。

電車は通っておりません。皆さん、歩いて行きました。東から西に向かう道は三本しかありません。2号線と43号線と臨港線という海側にある線です。途中の小さい道は橋が落ちていたり、覗きますと瓦礫の山で道が通れない。震災のために出動するのに四駆がいると言われる方がありますが、四駆でも行けません。ほとんど徒歩、自転車、一番活躍したのが50ccのバイクです。私も妻のママチャリを借りまして芦屋に向かっていきました。芦屋まで6キロくらいの距離ですが、自転車で2時間かかりました。これが現実です。2号線を見ますと、車が止まっています。通行止めですが、渋滞で止まっています。徒歩しかありませんので、多くの人々が徒歩で神戸方面に向かって歩いていました。キャラバンシューズを履いて、

ヘルメットとかザックを担いで歩いていました。

なんで芦屋やねん。たまたま、偶然です。芦屋が望んでたから行って、最終的には十月中旬まで活動にかかわっていました。自然体というか、望むところに望まれるままに行きまして、しかも私が行きましたのは21日、その日から活動したんですが、それ以前にもボランティアの方がたくさん集結しておりました。21日の段階では私は新参者です。私は声が大きいからか、その時点で、数人のリーダーの中の１人として、「芦屋市ボランティア委員会」というのを発足させ、13人が委員に就任する。この名前も私がたまたまつけたものです。

その13人の委員は、よく新聞は若者がたくさん震災地に集結したと報道したんですが、20日、21日の時点では若い人は少数派で、私のようなおじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんが主流でした。その後に、ＮＨＫの「ソリトン」という教育番組のスタッフが取材にこれらて、それを見た若者たちが47都道府県、北海道から沖縄までのすべての県からボランティアに来て下さったのです。芦屋市のボランティア委員会の場合は登録が６名ちょっとです。非常に少ないです。登録にはミソがあり

まして、西宮市では3万名の登録ですが、それが皆活躍したわけではありません。私も西宮に登録していますが、一度も行ったことはありませんし、何もしていません。そういう人が結構いる。

最初、電話で受付をやっていた。電話で「また呼びますからお願いします」と言っても検索している暇はありません。後で来てくれという暇もない。来ていただいた方に仕事をやっていただく。登録は当てになりません。ボランティアで駆けつけた人が百万人とか二百万人とか言われていますが、実際はいい加減な数字です。登録した数字を足したのではないか。兵庫県の職員の人が毎日、「今日は、ボランティア何人いてますねん」と尋ねにきました。「そんなこと県がやること違うやろ。もっと他にやることあるのと違うのか」と言うたものです。足していって延べ二百万人。実際はもっと少なかったのではないかと思います。

自然に芦屋に誘われるままに行って、いつのまにか総務というポストから代表の恰好になってきまして、最終的には代表でやっていました。我々の世界では代表が偉いから指図やっているということはありません。皆さん

の好きなようにやられたらいいという方針でやっておりましたので、どの人も自由にやられたのではないかと思います。

救援ボランティアとその活動

我々、震災ボランティア、救援ボランティアという名前で呼ばれたりしていますが、救援ボランティアはどういう活躍ができるのか。私より後輩ですが、こちらに在学している花大の学生も来ていただきました。去年、卒業された方も名前も覚えておりますが、いっぱいこられました。福祉の学生が多かったです。救援ボランティア、震災ボランティアは何をするのか。私の方はコーディネーターの形で、こられた方の仕事の割り振りをする。こんなことを被災者が要求しているというので隊を作る。こんなんやってみないかと若い人に勧める。市役所の一つの部屋に陣取ってたんですが、もともとも組織されたものではありませんし、市役所の職員がやっていたわけでもありません。ボランティアの場合は、市役所の職員が陣頭指揮でやったものはすべてつぶれています。長田で

も兵庫でも東灘でも。もっと切実な問題として、市役所にいたボランティアと職員が喧嘩別れをして、市役所ボランティア全員が公会堂に移って拠点にして、行政とぶつかることが多かったように思います。

西宮は「西宮ボランティアネットワーク」として、4月から社団法人としてＮＶＮＤ（日本災害救援ボランティアネットワーク）というプロの集団に変わっています。ここも初期の段階では、喧嘩別れで、職員が陣頭指揮をして、朝礼で「おはようございます」とやっていたんですが、結局、つぶれてしまって市役所を出ています。市役所からボランティアが撤退する中で、芦屋市では十月中旬まで市役所の中にボランティアがいた。それができたのは職員が干渉しなかった、活動を制限しなかったのが主な理由じゃないかと思います。自由に、我々はこれがいいのと違うかということをやってきました。

「芦屋市ボランティア委員会」はどういうことをやってきたか。１月21日に正式に発足しました。それまでもボランティアはたくさんいました。ボランティアはどういう人たちか。避難している人たちの中でも自分たちにできることがあるんじゃないか。避難している人だけで

なく便所を掃除しよう。周りを掃除しよう。飯くらい配ろう。緊要のものを配ろうとという機運が出てきましたので、そういう人たちが集まって、物資を積み下ろしする仕事を積極的にやり始めました。それと同時に、よその市や県から来る人たちも現れました。芦屋市の場合は、最後まで募集はしてなかったんですが、マスコミがよその自治体もやっているからと芦屋も載せてくれたようです。受入れだけはやろうと。受付も我々ボランティアでやっていました。

仕事は何をするか。最初は市役所のサポート。若い人たちの声で「なんで市役所の手伝いをせなあかんのか」。一番の中枢の機能がマヒしている状態では全てが機能を果たしませんので、市役所を応援して機能を回復しようと。市役所の人材バンクのような感じで活動していました。市役所の職員が陣頭指揮でやっていますと、つぶれてしまいます。そこで二つの活動をするようにしました。一つはボランティア自身で、こんな活動をしたらいいのと違うかと考えだしてやる。それと同時に市役所の応援もする。二段階にやっていきました。

最初にできたグループはまず、子どもたちを対象にし

たグループです。子どもたちは座りっぱなしで、ゲートボールしたり、何もしない状態が続いていましたので、若い人の中に、たまたま保母さんがおられましたので、子どもたちを遊ばしてほしいと。これが「イルカ隊」です。「イルカ隊」で子どもを遊ばせる、ストレスを解消するグループを作りました。その時、市役所に掛け合いまして、学校の施設と器具を使っていいという了承を得まして、市役所の中、学校の中で活動する。

医者と看護婦を受け付けていました。ある時、「もういりません」と上（対策本部が市役所の上階にある）からお達しがきて、職員が紙を破ろうとした。「ちょっと待ってくれ。うちに来てもらうわ。看護婦さんが数名でグループ作って避難所を回ってもらえないか」と。カウンセリングをやる。心をなごます、話し相手になることを重点に置きました。「体どやねん」と若い人が言っても心を開いてくれませんので、「私、看護婦ですけど、体どうですか」と。そういう言い方がすごくよかったみたいです。「カウンセリング隊」として回っていただきました。

それから枝分かれして素人ができるもの、若い人が考

え出した「おしぼり隊」「お茶サービス隊」という分派ができました。ダスキンからぎょうさん貸しおしぼりをくれたんですわ。一トンくらい。市役所は邪魔になるし、どないしようと。それをいただきまして若い人たちが避難所に持っていきまして、熱いおしぼりをお湯で絞って渡す。これは非常に好評でした。「震災以来、初めて顔洗いました」という人がいっぱいおりました。1月終わりくらいまで、顔を洗うたことがない人がいましたので、好評でした。「お茶サービス隊」。熱いお茶がないんです。お弁当とかおにぎりは豊富にありました。パンは体育館の入口のところでダンボール箱に積んであります。パンは取り放題なんですが、誰もパンを持っていかない。食べすぎでパンなんていらん。逆に我々の方は、パン、どこに買いに行ってもありませんねん。大阪に仕事の関係で挨拶に行っても、大阪にパンがありません。パンが食べたいという時に、避難所に行ったらパン山ほどある。そういう状態でした。冷たい缶のお茶、ウーロン茶とかありましたけど、熱いお茶を持っていくのは好評でした。これも初期の頃、NHK「ソリトン」で市役所とうまく連携してやっているというので、お茶を持っていったり、

おしぼりを持っていく映像を撮っていました。

避難場所もモノが偏っています。モノは全国からいただいて豊富にありましたが、データ収集ができてないものですから、ボランティア委員会が総力で最初にやったことはデータ収集です。情報がないから、五百人避難しているところに、おむすびが百人分しかない。毎日人が変わるんです。避難している人も賢くなって、待遇のいいところを渡り歩く人がいまして、いろんな場合でいろんな形に待遇が変わります。いいところに移動してすぐ人数が変わります。赤ちゃんのおしめがない。アトピーの子どもたちの食べるものがない、お風呂にも入れない。アトピーの子どもたちの食べ物をかき集めてくる。きめの細かいことは市役所ではできませんので、生活物資は我々でやろうと。福祉の部長が本部長をやってたんですが、掛け合いました。食料と毛布と水に関しては国とか行政がやるのは当然のことやと。行政が完璧にやってくれるまでの間、我々が物資を持っていきましょう、というわけ。持っていった時に、情報収集で何が必要か、毎日、物資を一覧表に書きまして、それを市役所の物資倉庫から持っていく。われわれは、効率のいい関係で動い

ていたと思います。

そういうことがだんだん必要でなくなってきます。そしたら我々は引きましょう、と。行政も一致するのが難しいが、できるようになったら我々は引く。我々の方も行き届きません。ボランティアに来られる人は長い人は長いんですが、短い人は一日、三時間という人もいて徹底ができませんで、受付を二つ（新規その日の仕事の受付）にしたりして対処するんですが。「炊きだし隊」（避難所に出向いての一日だけの活動は多い。当会はデリバリーサービスで五か月間実施）は芦屋だけしかやってなかったんです。ご飯は食べられるんですが、熱い汁ものがないので、みそ汁を作ろう。小学校の家庭科調理室を借りまして、ボランティアの中にお店がつぶれたプロの調理師が何名がおられました。すごいですよ。これを会社にしたらごっついで。外国人に英語でしゃべられへん時、荷物運んでいる人で英語ぺらぺらなのがおります。料理を作るプロの調理師がいます。何でも来いです。コンピュータ技師もプログラムもお手のものです。優秀な人の寄り集まりができていました。プロの方が作る、県もバックアップしてくれました。市から家庭科調理室を

借りて調理はプロがやって、物資は県からもらいまして。後には兵庫県農協から一週間に二トン送っていただきました。県の保健所とタイアップしてこれに指導を仰ぐ。緊急時になかなかできないんですが、非常にうまく回転できたんじゃないかと思います。

芦屋市だけでしたが、フェリーを借りて、避難されている人に船に乗って避難してもらう。そこにも人を派遣しました。東京の女子大生を一か月間。給水ですが、水道局が水を給水車で運びます。水を汲むのを手伝ってもらえないかという依頼がありました。給水ボランティアが活躍をしました。水を汲むだけではありません。マンションの率が芦屋では高くてたくさんあります。上の方の人は歩いています。停電して危険なのでエレベータが動きません。17階の人が水を汲みにくるのを手伝う。芦屋市はお金持ちと言われますが、そうでない人もいっぱいいます。年寄りの街です。道を歩いていても若い人よりおじいさん、おばあさんに会うことが多い。そういう人たちがマンションに住んでいる。そういう人たちに水を運んであげることで皆さんに感謝されました。水道のモニターでは、感謝の言葉がほとんどを占めました。

「お助け隊」も作りました。ある時におばあさんがこられて、「服を着られない。家は立ってる。家具が倒れて開かない。年寄りが住んでますから起こせない。そういうのをやってほしい」と。最初のうちは百%お断りしていました。個人の頼み事を聞いていたら何千人いてもたまりませんので、大口しか受けてなかったんですが、だんだん個人にも広げようと。危険のない範囲で始めました。今回、初めて出てきた問題ですが、砂って液状化するんです。吹き出している砂を退けてほしい。道に砂を出しておけば市が取りにくる。砂を取りにいくというサービスはするんですが、おじいさん、おばあさんがいるところでは砂を出すことができない。トラックが入れない道も多い。液状化の砂出しも重要な仕事の一つになりました。倒壊家屋の家具の引出しは知らんところではやってたようですが、危険なので断れと。登録六千人、延べ三万人以上、ピークの時で一日七百五十人くらいの方が動いておられました。六千人は少ないようですが、芦屋の人口は八万二千人。職員が千三百人。本庁は八百人くらいですから、一日あたりでは本庁職員と同じくらいのボランティアが集まったことになります。

新聞では芦屋の死者が四百四十人に増えておりました。避難している方が当初の段階で二万五千人。避難場所だけの話で、八万二千人の中の二万が避難していて、お金持ちはホテルに避難していると聞きました。親戚の家に行った人もいます。世帯数でいくと、八千六百戸くらいが倒壊、半倒壊です。全体で一万五千戸くらいの家の半分くらいが潰れてしまったという状況でした。そういう中で、移動はほとんど徒歩なんです。１月の段階で高校三年生の女の子が吹田から通っていました。私も尼崎から自転車で通っていました。ＪＲ甲子園から芦屋まで歩く。２時間半、瓦礫の中を毎日歩きまして、朝、八時くらいには来てました。毎日九時過ぎまでおりました。真っ暗の瓦礫の中でＪＲ甲子園まで歩いて帰るのです。最後は親も信用して、自分もしんどいので泊まっておりました。そういう努力もしておりました。彼女は看護学生をめざして、看護学校に今は行っていると思います。

印象に残ってるんですが、五十過ぎの女性で、受付で両手にリュックサックで、「私、主人の許しを得てきたんです」。これが開口一番です。奈良から来られた。旦那さんに三日間、行ってもいいよと。リュックサックに

荷物を入れて三日間泊まって。3回くらいこられた。荷物はポットに入ったお湯なんです。ポットに入ったお湯はインスタントラーメンとみそ汁用なんです。市役所は電気がきてたのでお湯が沸くんです。「お湯ですか」と笑ってしまったんですが、涙が出そうになりました。目的を持っておられる団体はすべて登録をお断りしております。但し、コーディネートはしております。私どもは「何でもいいですから手伝います」とか「何でも構いません」という方だけを登録してできる方はできるところでやっていただいたらいいわけです。「何もできないけど何かの形でやります」という人たちばかりこられました。その中には、福祉の学生も来られてました。主婦も、会社の方も多かったです。土日は膨れ上がりました。これを見て、日本も捨てたものやないなと。そういう記憶があります。

震災ボランティアは今はほとんど活動しておりません。今は市民ボランティア・サポートクラブをやってますが、基本は震災ボランティアと同じなんです。できひんから手伝ってあげる。今、ふれあいセンターもできて、福祉のボランティア、社協が繰り出してボランティアをやっ

ていただいているので、私たちは一切そういうことはしない。ただ人手が足りない、震災当初は何万人もいたボランティアが、今は減った。ボランティアは意識なくやってたんですが、非常に少ない。福祉のボランティアも少ない。元の木阿弥になりましたので、正月にお餅つきをやる。その人手を出しました。お餅つき隊とかで杵でついて回ったら非常に早いんですが、それではいけないんじゃないか。仮設の中で、自分たちがやる。ただ若い人たちが少ないので若い人たち来てもらえませんか、主婦の方来てもらえませんかということにお手伝いする。仕事は少ないんですが、本当に困っておられる方、主体は避難をされている方、仮設におられる方、それを助けようとするグループを中心に考えていますので、自分たちで何かをしようということではありません。あくまでサポートです。

ボランティアの人権

「芦屋ボランティア委員会」はそういう活動でございました。まだまだたくさんあるんですけど、話をすると

三日間くらいかけても尽きない話があります。ボランティアの人権というのが、守られてなかったんです。１月21日の仕事で何をやったか。ボランティアを守るのはボランティアしかいなと痛感しましてボランティアを守ることに専念していました。行政とは対立ばかりです。どういうことがあるか。積み下ろし、仕分けの仕事は多くの人たちにやっていただきました。いろんな自治体でやっていました。今、百人、人がほしい。来て下さい。行きます。行ったら行きっぱなしなんです。休憩とか何もない。皆、クタクタになるまで倒れるまでやってる。そういう統制を行政で全くしてない。行政の職員は仕事でやってますから八時間やったら交代するとか四時間やったら休憩する。ボランティアに関しては集めるだけ集めて全く指示をしない。それはボランティアの方でお好きなように。ボランティア・グループは会社じゃありませんので、偉いさんがいて指示しているわけではありません。皆さん、今日、来ていただいた方々を投入しているだけです。長期と短期に分けて、四日以上が長期です。三日来てくれたらオンの字なんです。一週間リーダーしていたと思うともういないですから。

そういう中で、ボランティアの人権そのものが守れない。夜六時に明日から医師会の事務所を開きたい、だから人手を貸してほしい。何時まで？わからない。これは人権侵害も甚しい。私は仕事は夕方五時までと考えていました。真っ暗なんですよ、瓦礫もいっぱいあります。足をくじいた子もいる。真っ暗な中でやるのはおかしい。中年のボランティアで芦屋の人ですが、「医師会が頼みにきてるのに、なんで勝手に断る。今後のこともある」と。そういう対立もありました。ボランティアと言いましても、いろんなボランティアがいる。一日だけ来て仕事を与えてもらって、仕事がなかったら「なんで仕事がないんねん」と文句を言う人がいる。考え方がおかしんじゃないかと言うたんですが。

ボランティアの中にもさまざまあります。避難所から市役所の手伝いをしようと立ち上がったボランティアもいる。芦屋市内に住んでいる地元の人で手伝おうという人もいる。私のように、市外から県外から北海道から何もわからんと来た人もいる。そういう人たちは全然感覚が違う。同じボランティアでも、「ご苦労さんでした」という人もあれば、「ありがとうございました。助かり

ました」という人もいる。私は、「ありがとうございました」とは一度も言いません。私は助けに行ってる方ですから。助けられてる人もボランティアの中にいる。いろんな立場の人がいる。市役所の無理な要求も聞かんといかんのと違うかという人もおります。

そういう中で、私はできるだけ、明るいうちしか仕事はさせないという基準を決めました。そういう対立もありました。後で本人が納得したらやるということにしましたけど。広報課が、うぐいす嬢に、「あんたとあんたと来て」と勝手に連れていった。これは誘拐と違うか。本人の都合も聞かない。夜九時まで広報する。甲子園駅から歩いてボランティアに来ている人もいる。その人たちは明るいうちに帰してあげたい。

弁当ですが、同じ仕事をしているのに、職員に弁当が出てボランティアに出ない場合がある。行政の職員自身はそういう人権無視の気持ちは持ってないんですが、ボランティアが無視されたという状況はいっぱいありました。そういうことを守っていかないといけないと。正直言って、私は行政から多分嫌われていました。「文句ばかり言うやっちゃ。あんたら何しに来たんや」と。

だけど、ここではっきり言えるのは、自分を守るのは自分なんですよね。これからもそうだと思いますが、日本人は待ってるということがある。私たちもそうだったです。震災が起きてすぐ、その日、1月17日、18日、水が全然来なかった。水が来ないと周りの人たちはじっと待ってる。私と妻で水がどこかにないかと考えた。マンションでは出てる。マンションにもらいに行こう。動かないとだめだと思います。避難している人たちもじっと待ってる人と、うろうろ動き回る人と二種類ある。ボランティアもそうです。自分で何かをしようという気持ちでやらないとあかんのと違うか。若い人たちだけでなく、そういう社会に慣らされている。上の方から何かやって下さいと言ってくるのを待ってるんです。そんなのボランティアと違うのではないのか。全然、見ず知らずの人をコーディネートする。自分でコーディネートをやってる。誰かに言われてやってるわけではない。ところが、一方では待つ人が増えた。我々の年代層の方も待ってる人が多かったです。何をしていいかわからない。いっぱいの人が来ますので、待っててもらう。待ってると、ふざけあったり、遊んでたりしますと、避難している人は

「あいつら何や。何しにきた」と非難もあります。これから自分は何をしたらいいのか。何をしようというのかを考えて行くように、皆さんに望みたいと思います。

水でもそうです。みんな待ってました。我々は探しました。学校に行ってみよう。学校に避難している人もいました。学校には水がいっぱいある。皆、お風呂の水とかトイレの水を飲んでたんですけど、私らは水は豊富にありました。風呂の蛇口を開けておいた。チョロチョロ水が出てきまして、風呂がいっぱいになっている。他の人は蛇口を開けて、「出えへんわ」と閉めてしまう。長いこと、水が出ているのを知らん人がいる。水がないと言うてる時に私の家族は風呂に入ってたんです。やはり、積極的にことを進めていかないといかんのと違うかと。

自分の命は自分で守る

自分の命は自分で守る。ボランティアに行ってもそうです。皆さん、ボランティアに行かれる時、自分のことは自分でやる。自分の命は自分で守らないと。幸いにも六千人来られて一人も死亡者はいませんでした。足のケ

ンを切った京都の学生は一人おりましたが、晩に飲みにいって酔っぱらって足をぐねてケンを切ったんですが。皆、テンションが高くなって緊張してますから、現場で怪我をしたという話は聞いたことがありません。

ボランティアは誰でもできるんですけど、自分自身、積極的に、ボランティアにしろ海外に行かれても、自分で自分の身を守るということを念頭に置いて行動されたらいかがかと思います。福祉のボランティアの方もたくさんおられるので、これからそういうことに携わられる方もあると思います。ここで二つのボランティアの種類が出てきたのではないか。救援ボランティア、震災ボランティアと言われている、できへんからサポートするというボランティア。それと、元々いました福祉ボランティアの二つ種類があるのではないか。我々は福祉のボランティアにバトンタッチしまして、その人たちから要求があればお手伝いしようとやっています。本来の福祉ボランティアはなかなか活動できなかったんです。なぜか。本来ならば、ボランティアがいっぱいいるところは社協です。社会福祉協議会がボランティアの元締めやと思われてます。今回、この震災で社会福祉協議会が対外的に

全然機能しなかった。100%機能しなかったわけではありませんが、自分たちの身内のできる範囲のことはされていたようです。しかし本来から言えば、ボランティアを受け止めるのが社協の任務ではないかと思います。震災ボランティアでコーディネートをやったことがない。なぜそうなるか。今までのボランティアのコーディネートは、まずボランティアをしたいという人をストックする。来られる。その人たちをコーディネートするのはどういうことをするか。介護できる人いませんか。登録している人がいます。この人を紹介します。

もちろん、震災ボランティアの中でもありました。老人介護。目的を持って来られる中で一番多いのは老人の介護をやりますという人です。ある新聞で専門職、通訳、老人介護、身障者の介護が少なかったと書かれていました。私の感覚は全く逆です。通訳の方はたくさん来ました。困っているだろうと。芦屋という土壌もあるんでしょうが、フランス語からアラビア語、ポルトガル語、スペイン語、中国語に至っては広東語、北京語、上海語までありました。フランス語は当然、英語は当然。その方々が市役所の案内のとこにろ座ってたんですが、三日間座っ

ていて一件もない。通訳がいらないということではありませんが、市役所に用事にくる人は多少なりとも日本語はしゃべれるんです。英語しゃべれる人は若い人たちにいっぱいいます。その人たちが帰られた後、荷物運びながら通訳やるなら来て下さい、と登録して仕事をやっていただきました。

介護をされる方もいっぱいこられる。介護の必要な方は、芦屋市に二つほど施設があるんですが、そこに電話しても断られます。介護をする人は必要なんですが、今回の震災に限っては必要以上の人が来ていただいたので足らなかったという事実は芦屋においてはありませんでした。本来ならば、ボランティアコーディネーターが社協の中におりますのでなぜ来てくれないのだろうと思っていました。システムが違いますから。私たちは何をコーディネートしたかというと、仕事を作ってたんです。「イルカ隊」、身障者の方をお風呂に入れるお世話をする。それを自分で考えだしてやっていただくコーディネートのやり方です。今までのボランティア・コーディネーターのやり方は、こんなことをやる人がいます、それをお願いしますと。状況に応じて、こういうボランティアを作

りだしていかなければできない。ある地元ボランティアの会長にお会いした時に、開口一番おっしゃったのは、「非常に残念やった。自分の活躍の場がなかった」。彼は何十年も点訳をやられている。やりたくてもできない。グループの中には手話通訳の方や専門知識を持った方がいる。「残念やおません」と。力があるなら荷物を持ってくれ。地図も重要なんです。地図づくりをやってる。力のある人は力のいる仕事。力のない人は力のいらない仕事。固定概念で私はこれしかやらないでは、需要がない。福祉の専門家であれば、もう少し横に広げる。何でもやってくれる人でないと難しい。学生諸君が来て、何でもやります。そういう人はたくさんおられました。遂に福祉のボランティア登録されていて、今までやってきた人が全然できなかった。

人として何をすべきか

この中にも福祉学科の人がおられると思いますが、あらゆることができるオールマイティな福祉を考えられる方になっていただきたい。学校の理論だけでなく、クラ

ブも入る。私も山岳部と演劇部に二つ入っていました。役に立ちました。グループはどんなものかがわかる。どういうふうに構成したらいいか。学生自治会の仕事もやっていました。自治会の審査委員会を二期やっていました。そういうグループで培われた知識、やり方はどこでも通用する。私も通用しました。できるだけクラブに入って実際にやっていただいたらというのが私の希望するところです。

今後はどういう展開になっていくか。福祉のボランティアの方々が力を入れてやっておられます。芦屋市には自殺者がいないのが自慢やったんですが、残念ながら先月二人出ました。なんでこんなことになるか。年寄りじゃなくて、四十代の人です。在宅ケアで回られて福祉のボランティアが回るのはご老人対象なんです。今の福祉のかかわり方は老人と子どもに偏っている。今回、震災で一番辛い目に会っているのは私のようなおっちゃんとかおばちゃんです。家建つか建たないかわからない。お金がかかる。芦屋は豪邸ばかり建ってますが、一般の市民がいっぱいいるんです。何を悩んでいるか。芦屋にも文化住宅がある。ほとんど倒壊しました。その人たちは潰

れて行くところがない。建て替えるのに文化とかアパートは考えられない。マンションになる。行くところがない。不動産屋に行ってもない。

1月21日の委員会の委員の一人にこんな方がおられました。彼は私と歳恰好同じで三人目の子どもが奥さんのおなかにいた。彼は自宅に両親と住んでおられた。その家が倒壊した。子どもも両親も避難している。その人はマンションを持っていた。バブル経済で儲けてマンションを建てて、そのマンションが潰れた。借家の人は出る時に、敷金を払ってるんですが、全額返しなさいという政府からの指導があるんですが、返すお金がない。バブルでへこんで就職したんです。その会社で偉いさんで年金ももらえるということだったんですが、たまたまこの震災です。自分の持っていたマンションが潰れて、両親と住んでいた家も潰れて銀行からお金かりて立替えをしていた借金も残ってる。マンションを買った借金も残っている。ヘッドハントされて勤めた会社が神戸市内のビルを管理する会社ですが、その会社も倒産です。仕事もなくなった。その人が我々と一緒にボランティアをやっている。

こういう人はどういうふうにケアしたらいいか。老人とか子どもとかはマニュアルも揃っている。おっちゃん、おばちゃんのケアはこれからの課題です。皆さんもどういうふうにしたらいいのか。この四年間の課題として一度考えていただいたらと思います。

最後に一言、「人として何をすべきか」を考えてみました。

震災当初、芦屋市役所に集まったボランティアたちは、大なり小なりの被害を被った罹災者であり、また、避難者が多かったように思います。学生たち若者も当然多くいたが、我々中年のオッチャン、オバチャンも多く目につきました。私自身も家屋が半壊し、仕事も中断し、これからの先行きが全く見えない状況の中、ボランティアに出かけてしまったのです。今思うと、命の証だったのかもしれません。

人に何かしたい。人を手伝いたい。人を助けたい。助けることによって助かりたい。大震災で生き残った者として生きている証に活動に駆られたのしも知れません。人が人としてできることは何か。今までこれほど他人のことを考え、他人を中心に行動したことがあったろうか、

自分中心の世界から他人中心に。

今まで奉仕というと、してあげるという気持ちが根底にあったことは事実ですし、人のことなどどうでもいい、かかわり合いから一歩引いた気持ちがあったように思います。

避難所の人たちに何ができるか、何をしようと考えたことはなく、いろんな情報が混乱する中で、思いつくままに「即断即決」ではなく「即断即実行」をモットーに実施していきました。

市役所の行政支援の他に個人宅への水運び、お年寄りの話し相手、物資の配布等十六種類以上の活動グループを作り、細かいサービスを提供してきました。「よくまぁ、これだけ思い付くねぇ」と言われたりしますが、なぜか自然に思い浮かんだことを提案すると皆さんの賛同が得られました。無理なく自然にことが運ぶ。

救援というと、瓦礫の中から生き埋めの人を引きずりだしたりする派手なものを想像しがちですが、現実はどうでしょうか。自分たち非力なものができることは、着るものも食べるものもあげることができなかった震災直後、上手に言えませんが、とにかく掛ける励ましの一声

が。寒空でカチカチのにぎり飯をほおばる時、温かいいっぱいのお湯が。お年寄りの背中をさする暖かい手が。何もできない自分たちの何げない些細なことでも精一杯の真心が人としてできることであり、どれだけ多くの人々に希望が与えられたことでしょうか。

時間が経過するにつれて状況が刻々と変化して行き、ボランティアのやり過ぎや、干渉のし過ぎや、また善意の押し売りのような現象まで出てきて批判されたりします。避難者の中から「我々は避難しているが、難民ではないし、ましてやホームレスでもない」という声が上がります。救援物資も何か施しのようで。施しをするボランティアはあくまでもサポートするという絶対条件下で活動すべきで、自立できていく部分から逐次手を離して行くべきであり、後は心の友だちとしてのお付き合いになれないだろうか、と思うのです。